

令和6年度 認知症地域支援体制推進全国合同セミナー

【報告1】 認知症になってからも暮らしやすい鳥取市をともに創る

～鳥取市認知症施策推進計画策定の取り組み～

活動報告への質問と回答（Q&A） 鳥取県鳥取市 永松美起氏 金谷佳寿子氏

質問：

WGのご本人様の選定は、行政の方がされたのでしょうか。また、ご本人様たちの認知機能に大きな差はありましたでしょうか(MCIレベルの方など)。

回答：

WGメンバーの選定は行政で行いました。

事前の聞き取りをもとに、本人参画の取組をより進めている小規模多機能居宅介護支援事業所に、利用されている本人の中で「ワーキングに行ってみたい」と思ってくださいる方に出席してほしいと伝え、事業所の方に選定してもらいました。WGメンバーになるための条件は特に決めていないので、要介護度も認知機能についても様々な本人が出席されていましたが、それぞれの視点で、その時々で大切に思っていることを話してくださっていました。

質問：

ご本人発信の声とは、例えば、具体的にどのようなものでしょうか。参考までにお知らせください。

回答：

ワーキングにおけるWGメンバー同士の対話の中で出てきた声はもちろんですが、例えば認知症本人ミーティングで出てきた意見、認知症フォーラムの参加者アンケートに記載して下さった内容、日々の窓口相談や家庭訪問等で見聞きしたこと等、特別な場面でなくても、日々の暮らしの中で、思いや希望等を表している様子を本人発信と捉えています。鳥取市の本人からは、具体的に「地域のもっと小さな単位で話せる機会があるといい」「『失敗したらどうしよう』と思うこともあるが、何もしなければできていたこともできなくなる。機会を見つけて外に出かけることも大切」「本人ミーティングはラッキーな人しか集まらないのではなく、もっと市民全員が知っているものになればいいと思う」等たくさんの方が聴かれています。こうした本人の声をもとに、ともに創ったのが「鳥取市認知症施策推進計画」ですので、こちらもぜひご覧いただけたらと思います。

質問：

県としての本人の関わり、立ち位置が難しいなと思いました。ここからさらに、本人の輪を広げる、より活躍していただくにはどのようなものがあるのか、県としてのふるまいについて、アドバイスがいただけたらと思います。

回答：

県の立場だと本人と一緒に何かをするという機会は少ないかもしれませんが、本人と活動をともにしているパートナーとつながって、情報収集を行ってはどうかなと思います。

県は市町の活動がより良く出来るように後方支援を行ってくださっていると思います。活動パートナーを通して本人の声を聞き、その声を起点にどうあったらより本人参画が進み、継続しやすくなるのか、本人とともに検討する機会や仕組みを作っていくことが出来ればより良いかなと思います。

鳥取市も県の担当者と連携を取りながら、県内の本人の声を共有し、必要な研修や広報、事業等について一緒に検討しています。しかし、実際に本人と何かを一緒にすることで実感的理解が深まると思うので、お忙しいとは思いますが、出来る限り時間を創って現場を見ていただけると嬉しいです。

令和6年度 認知症地域支援体制推進全国合同セミナー

【サプライズトーク】 本人からのメッセージ よりよく暮らしていくために、自治体に望みたいこと
活動報告への質問と回答（Q&A） 大分県大分市 吉川浩之 氏 戸上守 氏

質問：

一年半の閉じこもり期間からどのようなきっかけで外に出ることができたのでしょうか。

回答： （吉川浩之）

戸上守さんの妻が戸上さんの住む豊後大野市の保健師であり、以前吉川の講義を聞いた事があり、吉川の所に夫である戸上守さんを連れて来た事がきっかけ。

質問：

吉川さんはケアマネということですが、戸上さん以外で、何人のかたを担当されていますか？

回答： （吉川浩之）

現在は2～9人。ピアサポートの委託事業を受けている為、今は少ない人数を担当している。
主に(大分)市以外の遠方の方のケアマネージメントを担当している。

質問：

ご本人の声をお聞きするために、具体的にどのような質問・声かけをされているのでしょうか。

回答： （吉川浩之）

人(ご本人)によって質問や声掛けの内容、仕方、タイミング、環境設定、雰囲気作り、言葉遣い、頻度等が異なるので、一概には言えない。認知症の有無に限らず、同じ方であってもその時の相手の様子で声のかけ方等は異なる筈。
相手に対する尊厳(リスペクト)を持って接する事が最も重要であり、その表現方法を千差万別であると察する。

質問：

県としての本人の関わり、立ち位置が難しいなと思いました。ここからさらに、本人の輪を広げる、より活躍していただくにはどのようなものがあるのか、県としてのふるまいについて、アドバイスがいただけたらと思います。

回答： （大分県高齢者福祉課地域包括ケア推進班 大津）

「県としての本人の関わり、立ち位置が難しい」と感じたことはありません。認知症疾患医療センター、デイサービス、オレンジカフェ等に出向いたり、ときには若年性認知症コーディネーターの方と同伴訪問をする中で、たくさんのご本人に出会っています。会議や研修等を開催するヒントは現場にありますし、企画会議にはご本人に参画していただいております。

【報告2】 地域の特性を活かして、地域で暮らし続けるための支援体制づくりに分野横断で取り組む
～切実な課題である移動支援を入りに～

活動報告への質問と回答（Q&A） 秋田県羽後町 伊藤和恵氏 小林諭史氏 高橋遼矢氏

質問：

うごおたすけ隊は、認知症ではない人も利用していますか？

回答：

うごおでかけバスやタクシーの利用に疲労感を覚え、おたすけ隊の利用にシフトされた、という利用者さんや、診断はされていないけど、少し日々の段取りにとまどわれるようになった方、運転免許返納するかどうか悩み、おためしでおたすけ隊を利用始めた方など「認知症ではない人」もいます。

質問：

うごおたすけ隊の受付予約の体制について知りたいです。

回答：

生活支援コーディネーターが事務局になって、受付予約を担当しています。
おたすけ隊のほとんどはグループLINEに登録しています。会員は月に1回、対応可能な日をLINE上のスケジュールに入力します。担当する会員と希望者のマッチングは生活支援コーディネーターが行い、グループLINE上でお知らせします。

質問：

うごおたすけ隊の方が自分の車で事故を起こしたり、利用者にケガをさせてしまった場合はどのように対応していますか？

回答：

まずは、事故やケガをさせることのないよう、事前に自動車学校で包括支援センター、生活支援コーディネーターがかかわり、講習会を開催。事故、けがなどの緊急時は生活支援コーディネーターへ連絡。自動車保険は個人の加入しているもので対応後、発生した差額を補填する、という取り決めで納得いただいた会員にご参加いただいております。乗り降りなどの事故・けがはボランティア保険加入で対応しております。

質問：

羽後町包括さんの、うごまちハッピー運転教室&Dカフェのお話が非常に興味深かったです。私が担当している地域も車が手放せないため、同様の教室ができたと思うのですが、自動車学校に直接声掛けしても大丈夫でしょうか。誰かほかにも声掛けしてから動いた方がよいのか、ご意見いただけたらと思います。

回答：

興味を持っていただきありがとうございます。羽後町の場合は、地域包括支援センターの推進員が事前に自動車学校に認知症サポーター養成講座の受講を働きかけ、受講後、職員のみなさんにご理解いただいた上で、「で？何をしたらいいんだろうね」と自動車学校内で話題になったタイミングで、住民の声を伝え、認知症カフェの企画提案、という流れで進めました。

質問：

認知症サポーター協会の事務局や管理はどこが担当していますか？

回答：

協会の事務は協会の会員が担っております。管理ではありませんが、担当部署は健康福祉課内の地域包括支援センターとなっています。

専門職につなげるような相談・事案があった場合、地域包括支援センター社会福祉士が各機関につなげています。

【報告2】 地域の特性を活かして、地域で暮らし続けるための支援体制づくりに分野横断で取り組む
～切実な課題である移動支援を入りに～

活動報告への質問と回答 (Q&A) 秋田県羽後町 伊藤和恵氏 小林諭史氏 高橋遼矢氏

質問：

高齢者の運転については消極的なご家族もいるのではないかと思います。参加者の気持ちも大切だと思いますが、この事業に対する家族からの声(運転教室に参加したあと)はいかがでしょうか？

回答：

運転について消極的なご家族から地域包括は相談を受けます。ハッピー運転教室へのご参加をすすめ、客観的なものさしとして物忘れチェック機器での結果表や、自動車学校の運転の評価、視力、視野検査の評価などをお伝えします。本人が納得した上で免許が返納できるようご家族にもお声がけした結果、「ハッピー運転教室にできる限り参加させたい」「返納後にどんな社会資源があるのかをもっと宣伝してほしい」という声がありました。

質問：

羽後町の計画のように、構成概念を示した図(ロジックモデル)を用いると、構成概念が整理しやすく、計画の整合性が高まるのではと注目しています。当事者とともに計画を評価・改善する時も(行政の担当者が変わったとしても)体制として、PDCAサイクルが継続しやすそうだと思います。

計画の立案の時点から、評価・改善を想定することも1つ重要なポイントだと思いますが、計画の周知、評価など運用の実際や、先行自治体としての課題を共有いただけますと幸いです。

回答：

羽後町はアジャイル型地域包括ケア政策共創プログラムに行政、地域包括、生活支援コーディネーターがチームとして参加し、計画を作成。その点では後発部隊というか、先進地なんてとんでもない、というものです。

このプログラムは藤田医科大学と医療経済研究機構が主催、実施協力として厚労省老健局、愛知県豊明市、メンターとしては亀井善太郎先生、服部真治先生、岩名礼介先生など、豊富な実績を有する方々がかかわっております。

質問：

県としての本人の関わり、立ち位置が難しいなと思いました。ここからさらに、本人の輪を広げる、より活躍していただくにはどのようなものがあるのか、県としてのふるまいについて、アドバイスがいただけたらと思います。

回答：

羽後町は「活躍する認知症の診断を受けた〇〇さん」というフレームはありません。楽しく自分の好きな分野で参加している、異世代交流のクリスマス会があればもみの木を届けてくれるあのひと、仲間としてかかわっているひとが認知機能が低下してきた、診断を受けたな、という場面になっているけどともに過ごす時間は続くよね、という状況です。

質問：

防災と認知症 大切な視点ありがとうございます。個別避難計画は防災課が作成するということでしょうか。

回答：

現在、個別避難計画の作成と管理は福祉部局の課で行っておりますが、今後、作成については本人の現場に近い担当課（福祉）で行い、管理と計画作成のコーディネートを防災対策課が行うことで、連携体制を作る予定にしています。

質問：

今年度から認知症と防災というテーマでワークショップを始める予定でいます。今年度は認知症の人や家族、関係者など誰がどこで防災についてどうしているのかを知るためのワークショップを開催予定なのですが、漠然としていて、具体的なことを決められずにいます。防災でまずはここに焦点を当てたらいいよというテーマはありますか？

回答：

「認知症と防災」をテーマで、ということだけではワークショップの開催は難しいかもしれません。例えば「認知症のある方が避難する際に不安なことは何か」「避難所で安心して過ごすために必要なこと」等、具体的な場面を想定すると話すテーマが見えてくるかと思います。実際に地元の避難訓練等に認知症の人と参加して気になった点などをピックアップしておき、それをテーマに話し合うこともいいかと思います。

質問：

ガチャのミキサー車は既存の物ですか？それとも、イベント用にカスタマイズした物ですか？

回答：

ミキサー車は既存のもので、ミキサー車は、災害時には生活用水の給水車として活躍するので、そのことを知ってもらうことも合わせ、地元の生コン組合の皆さまが出展してくださいました。カプセルは特大のものを購入しました。

質問：

県としての本人の関わり、立ち位置が難しいなと思いました。ここからさらに、本人の輪を広げる、より活躍していただくにはどのようなものがあるのか、県としてのふるまいについて、アドバイスがいただけたらと思います。

回答：

都道府県の方々が現場で本人と関わることは実際に難しいかもしれませんが、市町村の取り組み、例えば本人ミーティングやカフェ等の取り組みに足を運び、一緒に現場で過ごしていただくだけで、市町村担当者となれば心強いと思います。その取り組みを他の市町村に共有し、顔つなぎをすることも、都道府県として重要な役割になるとと思います。